

本当の教えに出会うことは「生きる」ことから、「生かされる」ことへの大転換

# 無碍の一道 第88号

発行：2023年5月13日

発行者：浄土真宗本願寺派 長尾山 天龍寺  
〒739-0147 住職 天野英昭

東広島市八本松西6丁目10番1号

☎・FAX 082-428-1360

## 宗祖親鸞聖人降誕会法座

日時 5月31日(水) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~ 昼席 13:00~

ご講師 牛尾 かおり師 (広島市安佐北区深川 明光寺坊守)

## 第128回歎異抄輪読会

日時 5月25日(木) 14:00~15:30頃

ご講師 松田正典先生 (広島大学名誉教授)

費用 500円

参加者 天龍寺の門信徒の方のみならず、どなたでも参加は自由です

## 安居会法座

日時 6月28日(水) 9:00~15:00頃

朝席 9:00~ 昼席 13:00~

講師 朝枝 暁範師 (北広島町 本立寺住職)

天龍寺仏教壮年会定例会 5月31日(水) 19:00~20:30

天龍寺ゆかりカフェ 5月20日(土) 14:00~15:30

天龍寺仏教婦人会清掃奉仕 6月10日(土) 13:30~15:00

## 50代の半ばにこのようなことを書かせていただきました。 I

少し高飛車な言い方になりますが、失礼の段お許しをいただければと思います。政治・経済・科学・医療技術等の進歩・発展は、「人が一度の人生を出来るだけ長く生き、しかも生きている間はより快適により豊かに暮らす」等のための手段・方法なのかなと考えることがあります。

また、食べるためには、身を粉にして働かなくてははいけません。しかし、食べていてもいつかは死を迎えます。何のために今の様に悩み・苦しみ・悲しみ等に出会いながら生きていかななくてはならないのでしょうか。病苦にあえぐ人は、健康の支えが傾いたからでしょう。

また、この13年の間、大切な夫や妻を失い、子供に先立たれたご遺族・ご親族の方には、本当に辛く・悲しいご縁等に立ち会わせていただいたこともありました。その様なご縁に会うたびに、厭世的な言い方になるかもしれませんが、やっとの思いで幸福を手にした瞬間から、苦しみ・悲しみ・悩み等の魔の手が足下から背後から近づいているのかも知れないと考えさせられる時がありました。残念ながら、健康・財産・名誉等は、私たちに幸せ・喜びを与えます。

しかしながら、私たちに幸せ等を与える物は、時にして不幸や涙の原因になるものもあるのかもしれませんが。これらの支えが崩れた時、人間の価値観で言うところの幸福も崩壊し、悲しみに沈まなければならないのかもしれない。諸行無常の如く、一切の滅びる中に、滅びざる幸せと申しませうか。

人はこの世に生を受けた瞬間から、これも厭世的な言い方ですが、死に向かって生きている存在とも考えられると思います。それでは何故に人は、この様に辛く・苦しく・悲しい縁に会いながら、耐えて忍んで生きていかななくてはならないのでしょうか。また、どこに向かって生きている存在なののでしょうか。私たちは、おぎゃーという泣き声と共にこの世界（海）に投げ出され、最初は親の保護のもとで泳ぎますが、しばらくすると自分でこの海を泳がなくてはなりません。受験戦争に始まり、昨今は就職戦争に立ち向かい必死で泳ぎ、会社に入っては出世競争に明け暮れ、世界と戦いながら業績の向上に励み、家庭の問題、内外の人間関係等、様々な事に悩み・苦しみながら、一方で荒海の中を健康・家族・地位・名誉・財産等という丸太に必死にしがみつき、一時の幸福にしたりしますが、時に昨今のリストラ・会社の倒産・年金支給額の減額等あげたらきりはありませんが、その様な大波・小波が押し寄せ、丸太が流され、また必死に泳がなくてはなりません。勝った負けた・得た損した・大きい小さい・長い短いという相対（比較）の世界の中での迷いに翻弄されながら、気がつけば老・病・死が近づいており、有限（限りのある）の世界の宿命に歎き・絶望し、死を迎えるのかもしれない。

浄土真宗にご縁をいただいた私たちは、その意味でも親鸞聖人の一生・著書等から生きていく意味・方向性等を訪ねていくことが大切だと思います。親鸞聖人は私たちのこの人生を「苦海」「難渡海」と例えていらっしゃいます。そしてこの「苦海」を自分の力で泳ぐのではなく、大きな船、つまり弥陀の本願と共に生き、自らの娑婆の縁が尽きたらお浄土に還らせて仏にさせていただく身であると言われます。

以前「下山のすすめ」という本がありました。私はどうもこの「下山のすすめ」という言葉に抵抗がありました。個人的な発言で申し訳ございませんが「人生」とは「人が生まれ生きる」と書きます。つまり生を受け死ぬまでを人生と考えれば、成長し生産性を高め・社会貢献等が出来る時が人生のピークで、老いたり・病んだりすれば、その生産性・社会貢献が衰えます。その意味から考えますと、「下山」という言葉の意味も解されますが、それは老いること・病むこと・死ぬこと等はマイナスというとらえ方になると思います。

しかし、仏教の目的は、自力・他力を問わず、「仏になる」「仏にさせていただく」ことですから、生まれて、老いて、病んで、死んだ後に、お浄土に還らせていただき仏にさせていただく。ここに、浄土真宗にご縁をいただいている私たちの、人として生を受けた意味・意義・目的・方向性等があると思っております。

(次号に続きます。)